国語総合の傾向

はじめに

医療の専門家を目指して当大学への入学を希望されている皆さんは、いずれ医療専門職となって社会の様々な問題を抱えながら生活している人々とうまくコミュニケーションをとることが必要となります。そのためには、現代社会における人々のあり方を論じた文章を数多く読んで内容を理解し、それに対する自分の考えを持つことが大切です。筆記試験では、内容の読解までにとどめていますが、日本語を正確に読み、正確に書くことは大学での学習のスタートラインです。

傾　　向

1　マークシート方式による選択式です。

2　現代文２題で、その内訳は評論２題または評論・随筆各１題です。
　１問目の評論文の問題は科学・歴史・心理・哲学・文化など幅広いジャンルから出題される、やや硬質な文章で、内容把握が中心です。２問目の評論文または随筆文の問題は１問目よりやや柔らかめの文章で、内容把握のほか、さまざまな国語の知識が問われます。いずれの問題も高校の教科書レベルの文章が出題されます。

3　漢字の読み書きは必須で、語意、四字熟語・ことわざなどの知識問題も頻出しています。また読解問題は空欄補充、欠文補充、指示内容、内容説明、理由説明などの部分読解問題と全体読解問題（筆者の主張、内容一致など）に分かれます。

4　たとえ易しい印象を与える評論文であっても、受験生には馴染みのない評論キーワードが文中では使用されていますから、市販の入試問題集を解いたり、新聞や新書などを読んだりして、論理的、抽象的な文章に慣れておく必要があります。

5　評論文を読むための参考文献や、試験に際しての問題の取り組み方など、試験対策についてはオープンキャンパスの対策講座で詳しく解説します。

6　センター試験と比べると、本文の分量も少なく、選択肢の長さも短いので、はるかに取り組みやすい問題です。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

経済学者の(注1)ガルブレイスによれば、広告は、人びとの欲望を無批判にかきたてる点で、望ましくない[a]バイタイである。隣人や広告につられて商品を買うという「依存効果」は、個人の主体的な自律を[b]ハバむ要因であって、克服されなければならない。そのためには政府が広告業を規制しなければならない、とガルブレイスは考えた。ところが現代においては、インターネットの発達によって、人びとは、商品の情報を吟味するようになっている。欲しい物があれば、ウェブでチェックする。このチェックするという機能が、これまでのテレビにはなかった。テレビだけを見ている人は、商品を批判的に評価する［A］がない。これに対してインターネットは、賢い消費行動を可能にし、(1)「欲望消費」のあり方を変容させてきた。

さらにインターネットを使えば、ほとんどタダで、批判的な情報が手に入るようになってきた。(注2)クリス・アンダーソン著『フリー〈無料〉からお金を生み出す新戦略』は、そんな時代の新しい現象を描いた好著である。アンダーソンによれば、ウェブ上の(注3)コンテンツが無料になるのは、ウェブ上に情報提供する人が増える一方で、情報に対する需要は、それほど増えないからであるという。情報に対する需要は、なぜ増えないのか。それはそもそも、人びとの「可処分時間」に限界があるからである。人びとが情報を受容できる時間は限られている。（１）

情報の無料化に(2)拍車をかけているのは、若い人たちの［B］である。若者たちは著作権に無関心であるか反発しており、インターネットを通じて、無料のコンテンツを探す傾向にあるといわれる。そうしたなかで確実に売れているのは、アップル社のアイポッド（iPod）やアイパッド（iPad）のような情報端末機である。私たちは端末機器にお金を出す一方で、情報を無料で楽しむようになってきた。（２）

無料で享受できる商品は、従来の社会にもあった。例えばスーパーの食品売り場には、無料で試食できるコーナーがある。ところがネット上では、この無料の試食（情報）の割合が、九割以上にまで高まっていく。ＤＶＤをコピーするためのソフトや、画像を処理するための基本的なソフトなどは、現在、ネットを通じて無料でダウンロードすることができる。すると企業戦略も変化せざるをえない。企業はまず、基本的なソフトを無料で提供して、多くのユーザーを獲得する。そして、有料のプレミアム版を買ってくれるほんの一握りの人びと（五％くらい）を相手にすることで、商売を成立させなければならない、というわけである。（３）

ネット上ではまた、「海賊版の(3)パラドックス」という現象もみられる。海賊版のパラドックスとは、ある商品の海賊版が大量に流通すると、本物のブランドを求める人も増えるため、海賊版を容認したほうがかえって儲(もう)かる、という論理である。そのような商売の論理は、ネット上にも広がってきた。企業はネット上に、できるだけ無料のコンテンツを提供したほうが、商売になるといわれる。（４）

こんなケースもある。アメリカの「(注4)ＴＥＤカンファレンス」は、招待者のみが参加できる講演会である。毎年、企業経営者、ハリウッドのエリー

ト、元大統領などが、カリフォルニアのリゾート施設に集まって開催されている。テーマとしては、テクノロジーやエンターテイメント、あるいはデザインに関するものを扱っている。二〇〇六年になって、このカンファレンスの主催者は、それまでの閉鎖的なやり方をやめて、ひとり一八分の講演を、ウェブ上に無料で公開した。するとこれまでに五、〇〇〇万回も視聴され、カンファレンスの経営はこれによって大成功をおさめたという。チケット代は、九九年の六〇〇ドルから、〇九年には六、〇〇〇ドルにまで[c]ハね上がり、参加者は六〇〇人から一、五〇〇人に増えたという。（５）

いったい、六、〇〇〇ドルもするカンファレンスの中身が、どうしてネットを通じて無料で視聴することができるのだろうか。その理由は、カンファレンスというのはたんに講演を聴く場ではなく、そこに参加する出席者たちと歓談する場であって、そのことに参加者たちは大きな［C］を認めているからである。参加者たちは、講演者と同じくらい優秀な人びとと会話することに、六、〇〇〇ドルを支払う用意がある。ネット上では情報コンテンツを無料にしても、(4)直接的な経験には高い価格がつく。インターネットが発達したおかげで、体験型の商品には、大きな利益が見込める時代になってきた。

すでにカリフォルニア大学のバークリー校では、一〇〇人を超える教授の講義がユーチューブで配信されており、これまでに二〇〇万回以上も視聴されたという。スタンフォード大学やマサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ）も同じように、講義を無料で配信している。ＭＩＴのオープンコースウェア構想では、講義ノートや課題や講義ビデオなど、ほぼすべてのコンテンツが、オンラインを通じて無料で提供されている。なぜ大学側は、コンテンツを無料で提供するのかといえば、それは大学が、情報そのものよりも、教員と直接コミュニケーションすることに価値を置いているからであろう。もちろん学生にとって、大学の卒業証書も、キャリア形成のために重要な役割を果たしている。けれども、大卒資格を得ることの価値は、たんに講義を視聴してその内容を学ぶことではなく、教員や周囲の優秀な学生たちとコミュニケーションするという、その［D］にこそある。大学が提供する情報そのものは、無料でもかまわない。いや無料だからこそ学生をひきつける、という［E］が成り立つのである。

こうして、大学を含めた情報産業においては、作った商品をすべて有料で売るという考え方が通用しなくなってきた。そこで私たちは、発想を逆転させて、作った商品の九割以上を無料で提供するという、「浪費の効用」について考えなければならない。(5)例えばタンポポは、その種子をばら撒[ま]くことによって、自分の子孫を増やしていく。タンポポの種子は、その大半が無駄になるけれども、とにかくあらゆる繁殖の機会を捉えて繁殖しようとする。情報産業の場合にも、同じことが当てはまるかもしれない。企業は、あらゆる機会を捉えて、商品の種子をばら撒いていく。するとある偶然の機会に、その情報が購入され、思わぬ方向にビジネス・チャンスが広がっていく。そのような進化論的な発想がなければ、企業は利益を上げることはできないのではないか。ネット社会においては、大きな試行[d]サクゴが求められるようになってきた。

クリス・アンダーソンによれば、今日の革新者は、「希少なもの」をいかにして「効率的」に使うかを考えつく人ではなく、「潤沢なもの」をいかに

「浪費」すればよいのかを考えつく人であるという。無料で何かを提供する。するとそれが社会の変革を促すと同時に、あらたな商売の機会を生み出していく。こうした進化論的(注5)イノベーションの方法は、「(注6)ロスト近代」の駆動因を理解するための、重要なシ^{e}ーサを与えているだろう。

それ以前の社会においては、人びとは、広告に釣られて自身の欲望を肥大化させてきた。人びとは、さまざまな記号消費に踊らされ、欲望を喚起させられることによって、資本主義を駆動してきた。ところが「ロスト近代」の社会においては、広告以外の商品情報が、あふれだしている。私たちは商品の中身をいっそう吟味するようになっている。「ロスト近代」社会においては、私たちの欲望とは無関係に、情報のシャワーが降ってくる。そうした環境のなかで、私たちは、本当に必要なもの、あるいは評価できるものを買うことができるようになっている。情報があふれる社会、もっと正確に言えば、「(6)情報を解釈する情報」があふれる社会においては、商品の質を吟味する力が養われていく。すると人びとは、商品の価格が限界費用にまで下がってから買うという、賢い消費行動に出ることができる。あるいは人びとは、あまり利益は上がっていないけれども、すぐれた商品を提供する企業というものを探して、賢くお金を使う方法を学ぶことができる。

（橋本努『ロスト近代 ― 資本主義の新たな駆動因』弘文堂による）

（注1）ガルブレイス＝一九〇八～二〇〇六年。カナダ生まれのアメリカの経済学者。
（注2）クリス・アンダーソン＝一九六一年～。イギリス生まれのアメリカの実業家。
（注3）コンテンツ＝動画・音声・テキストなどの情報の内容。
（注4）ＴＥＤカンファレンス＝アメリカの団体ＴＥＤ（Technology Entertainment Design）が開催する講演会。
（注5）イノベーション＝（技術）革新。
（注6）ロスト近代＝失われた近代。一九九〇年代の中頃から出現してきた時代状況を表すために筆者が考え出した造語。

問(一) 傍線部a～eのカタカナにあたる漢字と同じ漢字を含むものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a＝ 1　b＝ 2　c＝ 3　d＝ 4　e＝ 5

a　バイタイ

1　売り上げがバイゾウする。
2　バイショウ金を支払う。
3　野菜をサイバイする。
4　実験にショクバイを用いる。
5　バイシン員に任命される。

b

ハバむ

1 ソコクを離れる。
2 社長にジキソする。
3 友達とソエンになる。
4 キソを固める。
5 生育をソガイする。

c

ハね上がり

1 チョウヤク力を競う。
2 チョウバツを与える。
3 顔がコウチョウする。
4 愚のコッチョウ。
5 道路をカクチョウする。

d

サクゴ

1 タイサクを講じる。
2 作文をテンサクする。
3 パソコンでケンサクする。
4 光がコウサクする。
5 サッキュウに連絡する。

e

シサ

1 おチャを飲む。
2 子どもをソソノカす。
3 スナをかむ思い。
4 料理をツクる。
5 クサリにつながれる。

問(二) 空欄 A ～ E を補うのにふさわしい言葉を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。（同じ番号を二度以上選んではいけません。）

A＝ 6　B＝ 7　C＝ 8　D＝ 9　E＝ 10

1　目的　2　価値　3　手段　4　心理　5　体験　6　論理

問(三) 傍線部(1)「『欲望消費』のあり方を変容させてきた」とありますが、その「変容」の説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 11

1　テレビやインターネットの広告につられて商品を購入するという消費活動から、それらに惑わされず自らの判断で主体的に商品を購入するという消費活動へと変わった。

2　テレビの広告から得た情報だけに基づいて商品を購入するという消費活動から、自分で実際に商品を見てから購入するという消費活動へと変わった。

3　広告によって欲望を喚起されるままに商品を購入するという消費行動から、商品の質や価格を慎重に見極めたうえで購入するという消費活動へと変わった。

4　商品に対する欲望をかきたてられるままに購入するという消費活動から、生活するのに最低限必要なものだけを選んで購入するという消費活動へと変わった。

5　広告につられて有料の商品を購入するという消費活動から、インターネットで入手した無料コンテンツを楽しみ、有料の商品は買わないという消費活動へと変わった。

問(四) 傍線部(2)「拍車をかけている」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 12

1　誰もが賛同している

2　ブレーキをかけている

3　横から介入している

4　進行を一段と速めている

5　ちゃっかり便乗している

問(五)　傍線部(3)「パラドックス」の意味としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 13

1　概念　　2　逆説　　3　文脈　　4　類推　　5　混沌

問(六)　傍線部(4)「直接的な経験」とはどのような経験を言いますか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 14

1　カンファレンスの優秀な出席者たちと歓談するという経験
2　カンファレンスの講演をネットで無料で視聴するという経験
3　カンファレンスの出席者の前で十八分講演するという経験
4　カンファレンスに直接出向いて講演者の話を聴くという経験
5　カンファレンスの中身を無料にして大成功を収めるという経験

問(七)　傍線部(5)「例えばタンポポは、その種子をばら撒くことによって、自分の子孫を増やしていく」とありますが、「タンポポ」と「種子」がたとえているものの組合せとしてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

1　タンポポ＝ビジネス・チャンス　　種子＝作った商品
2　タンポポ＝有料の情報　　種子＝ビジネス・チャンス
3　タンポポ＝情報産業　　種子＝無料の情報
4　タンポポ＝作った商品　　種子＝有料の情報
5　タンポポ＝無料の情報　　種子＝情報産業

問(八)　傍線部(6)「情報を解釈する情報」の具体例としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 16

1　チラシに掲載された、今日のお買い得商品

2　電気製品に付属していた、その取扱説明書
3　購買者がウェブ上に載せた、商品の評価
4　電車内で見かけた、週刊誌の見出し記事
5　新聞やウェブ上に掲載された、テレビ番組欄

問(九)　本文から次の文が脱落しています。本文中の（1）～（5）のどこに戻すのがふさわしいですか。後群のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 17

ところがウェブ上には、ますます多くの情報が掲載されていく。

1（1）　2（2）　3（3）　4（4）　5（5）

問(十)　本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 18

1　インターネットで得られる情報の九割以上は無料であるが、価値のないものがほとんどである。
2　有名大学の講義がインターネットで無料で視聴できる現在、大学の進学率が減少の傾向にある。
3　「ロスト近代」社会は情報に対する人々の需要が増えているため、情報があふれ返っている。
4　インターネットが発達して情報が無料になっても、体験型の商品の価格は昔と変わっていない。
5　「ロスト近代」では、インターネットの発達による社会の情報社会化が資本主義の重要な原動力となっている。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現実が情報化されることによって無構造化、無焦点化、断片化という過程を進んでいるのに対して、現実を越えるべき藝術もまた、皮肉なことに同じ道を歩んでいると見ることができます。昔から、藝術は現実とは別の世界を作るものであり、何らかの意味で日常世界を超越するものだとされていたわけですが、今日の流れを見ていると、(1)藝術はむしろ現実の傾向に追随しているとしかいいようがありません。まず第一に指摘できるのは、現代の藝術はいわば現実の中で融解して、作品という完結したまとまりを壊しつつある、という事実です。昔は、ひとつの藝術作品はそれ自体で完結したひとつの世界であり、ひとつの中心の周りに閉じられた小宇宙を形成していると考えられていました。作家も鑑賞者もこれを眺めて、これとともに生きている限りは、その小さい世界の内部で自足的に生きているのであり、いわゆる日常現実からいっとき足を a踏み出しているのだ、といわれたものです。（　イ　）、二十世紀の半ば以来、そういう意味での完結した作品、別世界を作るような作品は、作家の頭の中でも、また実際のアトリエでも急速に壊れつつあるように見えるのです。

（　ロ　）、二十世紀のはじめからすでにそういう兆候が現われていたわけで、有名なマルセル・デュ・シャンという作家の実験は、その意味で記念碑的な仕事でありました。この人は、スキャンダル的な意味で歴史に残る『泉』という作品を作ったのですが、その作品とはなんのことはない、紳士用トイレの小便器そのものでありました。これをそのままはずしてきて展覧会場に b飾ったわけですが、これを見た人々は、そのあるべからざるものが、あるべからざる場所にあることに驚きました。

このスキャンダラスな「藝術的事件」に対して、のちにさまざまな弁護が加えられましたが、この弁護が、ある意味でいえば現代の藝術思想を典型的に代弁していると見ることができます。つまり、藝術とは現実に対する一種の反逆だというのは十九世紀以来の定説だったわけですが、デュ・シャンの弁護はこれを極端に延長したところに立っていたといえます。トイレには便器があるというのは常識であり、展覧会場には絵があって、便器はないというのが常識的な現実でありましょう。デュ・シャンの『泉』は、そういう常識から作られている現実を壊そうとする試みであり、そのためにトイレの便器を展覧会場に持ち込んでみると、そこではじめて人間は(2)便器という裸の存在を見ることができるという主張であります。

じつはこの議論の背景には、われわれは日頃、実際にものをよく見ていないではないか、という哲学的な警告が秘められています。ものは手段として使っているだけであり、あるいは観念的に理解しているだけであって、あ肉眼でよくものを見ることはしていない、という考えが c潜んでいるわけです。実際の体験をふり返るとまさにその通りで、われわれはトイレを見て、それがトイレであって台所ではないことを確認しさえすれば、それをいものとして見ることをやめて、ただちにそれを使い始めるのが普通です。街に立っているあの信号灯にしても、赤い円形、青い光沢というものを

われわれは色やかたちとして見たことはないのであり、見ていると思っているものの、じつは見ているのは、進めとか止まれとかいう意味にすぎないと考えられます。

同様に、われわれはたいていの日常の事物を実際にはよく見ていないのであって、たんにそれを頭で知り、あるいはそれを使うために、うかりそめに見ているにすぎないと考えられます。これに対してデュ・シャンがしたように、たとえば便器をありうべからざる所へ持ち出して見ると、はじめてわれわれは便器というものをえものとしてしげしげと見るはめに陥ります。そして、現実を概念的に見るのでなく、おものを真にものとして見るのが藝術の意味だというのは、いうまでもなく近代の代表的な藝術観だといえましょう。

しかし、ここで注目すべきことは、この作品、『泉』なるものは、なにもデュ・シャンが自分の手でこしらえたものではないということでしょう。そして、彼が作ったわけではないということは、いわばこの現実からひとつの作品を切り離すという行為、すなわち作品を現実に対してひとつのまとまった世界として作りあげるという行為は、なにもデュ・シャンがやったのではなくて、皮肉なことにわれわれが日常抱いている常識がやったのだと考えられます。便器は便所にあるものだという常識が、それを便所から離したとたんに、なにか異様なひとつのまとまり、展覧会の世界に侵入したひとつの異物として作り出したといえましょう。（　ハ　）、ここでは、デュ・シャンが攻撃した俗物の常識というものが、逆に彼の『泉』という作品を成り立たせているという、(3)皮肉な事態が起こっているわけです。

いずれにしても、デュ・シャンのやったことは、たんに現実の一部を切り取ることにすぎなかったわけですが、この傾向は現代ではだんだん輪をかけてひどくなって来て、さまざまな前衛藝術の珍現象を生み出しています。音楽の方面でも、（　ニ　）アメリカのジョン・ケージという作曲家の場合などは、ついに耳に聞こえない音楽を作り出すことになりました。舞台の上にピアノが一台あって、やがて人が集まるとケージ自身が出て来るのですが、そこで、どんな名演奏をするのであろうかと思って A固唾(かたず)を呑(の)んで見ていると、彼はピアノの前にいつまでたっても坐(すわ)っているだけなのです。もうそろそろ d弾いてくれそうなものだと思って、みんな一所懸命、耳を澄ませて待っていますが一向に何も弾かず、そのまま三分数十秒たつと、立ち上がって舞台から消えていきます。彼にいわせると、その間に人々の耳に聞こえてきたものがすべて彼の音楽であり、彼の作品であるというのですが、これは控えめにいっても、コロンブスの卵の焼き直しというものでしょう。つまり、種あかしさえ聞かされてしまえば、どんな素人にもできることで、いいかえれば、ただの思いつきにすぎません。それをひとつの音楽作品にしているものは、この場合もやはり、音楽会場には音楽があるはずだという、人々の常識にすぎないのです。

文学作品の場合でも、ひところオートマティズムという方法を考えた人があって、構想もなければ、筋も人物もなく、ただ頭の中に浮かんでくる気分やイメージを、片っぱしからオートマティックに書き連ねていくという試みがありました。作家自身も、(4)（甲）が出るか（乙）が出るか仕

事が済むまでわからないわけで、たまたまできあがったものが作品だということになるのですが、これは演劇のいわゆるハプニングにも通じます。ハプニングというのは、周知の通り文字通りハプニングであって、何が起こるかわからないところにB みそがあります。まずは近頃の傾向ですから男女俳優が裸になることになっていますが、これは一種の商業化であって、別に裸にならないまでも、ともかくそれに似た予想外のことが起これば目的はe 達せられるのです。この現象を別の面から考えると、藝術がだんだん作品という枠組をさえ失い、現実そのものの一部になりつつあることだといっていいかと思います。（ ホ ）、ハプニングとは文字通り「起こったこと」ですが、この世の中には毎日毎日なにか起こっているのですから、いいかえれば現実そのものが今や藝術になってしまったといってもいいわけです。

現に、そういうことを本気で考えている藝術家もいるようです。私はあるとき、現代の非常に有名な作曲家と話をしたのですが、彼は、自分の藝術作品は現実そのものに対する挑戦だというのです。彼が現実になにかひとつ刺戟（しげき）を与えますと、現実自体が動いて、それが思わぬ現象を起こしていく、その全部が彼の作品なのだというわけです。たとえば人の集まる会場に一種のオブジェのようなものを置くのですが、これに仕かけがあって、人が近づくとピンとかポンとか音がする。人が知らないで通りかかるとピンと音がするので、びっくりしてとびのくと今度はポンと音がする。こうして、ちょうど熱い鉄板の上にのせられた猫のように、人が音にあわせて踊っていると、藝術家は喜んでそこに自分の作品が生まれたというのだそうです。私はその作曲家に向かって、「あなたは選挙の時に投票するであろう。投票すると代議士が生まれ、その代議士が国会へ行ってけんかをする。そのけんかのもの音はあなたの作品なのか」と聞いたところ、少し困って二十秒ほど考えた末に、「それは私の作品だ」というのです。そこで私は、日本の新聞社の政治部はじつに馬鹿なことをしているものだと思いました。大まじめになって国会の乱闘を非難して、日本の民主主義のために嘆いていますが、(5)あれはなにも政治現象ではなくて某作曲家の作品にすぎなかったのです。

（山崎正和『混沌からの表現』ＰＨＰ研究所による）

問(一) 傍線部a～eの漢字と組み合わせると熟語ができる漢字を、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

a＝[1]　b＝[2]　c＝[3]　d＝[4]　e＝[5]

a　踏（1 波　2 末　3 襲　4 龍　5 踊）
b　飾（1 侵　2 委　3 装　4 接　5 利）
c　潜（1 字　2 在　3 維　4 攻　5 戦）
d　弾（1 温　2 差　3 摩　4 願　5 糾）

e 達（1 者　2 強　3 尽　4 生　5 早）

問(二) 空欄（ イ ）～（ ホ ）を補うのにふさわしい言葉を、次のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。（同じ番号を二度以上選んではいけません。）

イ＝ 6　ロ＝ 7　ハ＝ 8　ニ＝ 9　ホ＝ 10

1 ですから　2 じつをいえば　3 つまり　4 ところが　5 そこで　6 たとえば

問(三) 傍線部A「固唾を呑む」、B「みそがある」の言葉の意味としてふさわしいものを、各群のうちから一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

A＝ 11　B＝ 12

A「固唾を呑む」

1 息が詰まる　2 息が切れる　3 息を継ぐ　4 息を吐く　5 息を凝らす

B「みそがある」

1 趣向がある　2 苦労がある　3 理由がある　4 機微がある　5 価値がある

問(四) 傍線部(1)「藝術はむしろ現実の傾向に追随している」とは芸術のどのようなことがらについて述べたものですか。その説明としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 13

1 芸術が、日常世界を超越できず、世の中の常識をそのまま表現するものになっているということ
2 芸術が、ハプニングを起こして鑑賞者を驚かすことによってしか、人々の関心を集めることができなくなっていること
3 芸術が、もはや現実を超えるすべをなくし、小さな世界の中で自足しているということ
4 芸術が、現実とは切り離された一つの中心を持つ完結した世界を構成しえなくなっているということ
5 芸術が、世間一般に受け入れられるように、より単純で理解しやすいものになっているということ

問(五) 傍線部(2)「便器という裸の存在を見る」とありますが、「裸の存在を見る」と同じ内容を述べている表現として**ふさわしくないもの**を、次のう

ちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 14

1　波線部あ　肉眼でよくものを見る
2　波線部い　ものとして見る
3　波線部う　かりそめに見ている
4　波線部え　ものとしてしげしげと見る
5　波線部お　ものを真にものとして見る

問(六)　傍線部(3)「皮肉な」といわれるのはなぜですか。その理由としてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 15

1　デュ・シャンの『泉』という作品は、彼の攻撃する常識に依拠していたものにほかならないから。
2　デュ・シャンの『泉』という作品は、便器は便所にあるものだという常識に反しているから。
3　デュ・シャンの『泉』という作品は、たんなる便器が優れた芸術作品になりおおせているから。
4　デュ・シャンの『泉』という作品は、彼が自分の手でこしらえた、まとまった世界ではないから。
5　デュ・シャンの『泉』という作品は、展覧会の世界に侵入した、ひとつの異物にすぎないから。

問(七)　傍線部(4)「（甲）が出るか（乙）が出るか」の空欄（甲）・（乙）に入る言葉の組合せとしてふさわしいものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 16

1　甲＝吉　乙＝凶
2　甲＝禍　乙＝福
3　甲＝陰　乙＝陽
4　甲＝鬼　乙＝蛇
5　甲＝正　乙＝邪

問(八)　傍線部(5)「あれはなにも政治現象ではなくて某作曲家の作品にすぎなかったのです」とありますが、ここから読み取れるものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 17

1　落胆
2　諦念
3　驚嘆
4　揶揄（やゆ）
5　義憤

問(九) 本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、その番号をマークしなさい。 18

1 音楽会場には音楽があるというのはわれわれの常識であるが、ケージの曲はそれを覆したため作品とは認められなかった。

2 デュ・シャンの『泉』は、現実のなかでは便器そのものであるが、いったん展覧会場に展示されると、その場の雰囲気に調和して芸術作品に変貌した。

3 デュ・シャンの試みは、われわれがものをものとしてよく見ず、観念的に理解しているにすぎないという点を逆手に取ったものである。

4 芸術の目的は現実を超えた小宇宙をつくることであるが、二十世紀半ば以降そのような作品は、作家もつくらず、鑑賞者も求めようとはしなくなった。

5 芸術が作品という枠組を失い、現実の一部になりつつあることは、身の回りが芸術的な要素で満たされていることを意味する。

設問は以上です。